
white prank

Muk

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

white prank

【Nコード】

N8288G

【作者名】

M u k

【あらすじ】

ある集落に起こった大火災で、周りの人間が心中して1人になった青年と、神に見捨てられた横線入りの路地子の少女の白い悪戯を綴るお話。 殆ど、この作品は完成の見込みが見当たらないので完結とさせていただきます。最初の投稿で色々と恥ずかしい内容ですが、読んでくださった方々に感謝しています。

prologue : Pieces of God

神は地に子を産みつけた。

それはとてもとても深い森の中に。

彼らは森に集落を作り、神から授かった白き焔を身に灯していた。
後に、彼らは『神の子』と世間に称えられ、彼らは神を象徴する木彫りの像を作った。

しかし、ある夜。

悪知恵を働かせた人間が、出来心で森に紅き焔を放った。

焔は瞬く間に大きくなり、彼らの村を包み込んだ。

彼らは川に逃げ込み、その火災を凌ぐことが出来た。

しかし、神の木彫りの像は黒く燃え尽き、灰と化していた。

彼らは絶望し、その木彫りの像を囲むように皆首を切り、心中をした。

一つの、白い白い残り火を残して。

prologue : Pieces of God (後書き)

始めまして、Mukです。

ここに投稿するのは初めてで、メツチャ緊張しています。

右も左も分からない若輩者ですが、よろしくお願いします。

1st offense : Never move ACT : 1

愛する者が殺された神様。
死を嫌い、悪を嫌った神様は

『地』と『力』と『法』と、『拘束具』を1人の王様に与えた。

雨が静かに降る路地。

腐臭を漂わせるゴミ袋に囲まれて、彼女は空を見ていた。

彼女の額には、縦に三本、横に一本の黒い線が示されている。

彼女は、神に見捨てられた ストリート 路地子の1人。

生まれた時に、 ダスライン 出来損ないの横線が引かれ、生まれた時から世間に殺された子供達が路地裏に迷い込む。

彼らは料理店の裏口に隠れこんでは、使われなかった食材を詰め込んだゴミ袋を捨てられるのを待ちどおしにしているのだ。

ゴミ袋が投げ込まれた瞬間、子供達はそれを切り裂き、食糧に喰らい付く。

衣服が汚れては、水溜りで洗い流し、雨が降れば、喉を潤し、ペットボトルに溜め込んで重宝させる。

そんな薄汚れた プアーセクション 貧民区には、余所者が来るのは滅多に無い。

しかし、空色の濁ったそんな日に、腐敗した布に身を包んだ青年が

現れた。

「今晚は、お譲ちゃん」

「見ない顔だね……貧民区（ニッチ）の人じゃ……無いでしょ……？」

虚ろ気な眼を青年に向けて、か細い声で呟いた。

「まあ、旅人　かな」

「旅人さんはどんなお仕事してるの？　私のおとうさんは、かがくしゃって言った」

「僕は……聖職者では無い事は確かだよ」

「せい……しよくしや……？」

「神様に愛されている人たちの事だよ」

少女は頭を傾げ、必死に頭の中を整理する。

「じゃあ、おとうさん。　せーしよくしやだ」

「へえ……じゃあ、何でここに居るの？」

「袋にね、入れられてね、ココに居なさいってね、言われたの」

青年は、自分の状況が完全に理解していない彼女の事を見て、悲しそうな眼をした。

「それはね、神様だ悪いんだよ」

「かみさま？」

青年が彼女にそう告げた。

「嫌じゃないかい？　おとうさんやおかあさんに会えないの」

「嫌だよ、でも待つてたら……きつと」

「おとうさんは来ないよ。　おとうさんはね、君が嫌いだから」

「……何で？」

「それはね、神様は君が嫌いだから、おとうさんも嫌いになったんだよ」

「……そんなの嘘だ！！」

「（ほんとう）事実さ。　だけど、一つだけおとうさんに愛される方法があるんだ」

「何！？」

彼女の虚ろ気な眼に、希望の光が差し込んだ。

「神様に、ふくしゅう悪戯するんだ!!」

青年は、笑顔で少女に手を差し伸べた。

少女は、「うん」と言っつて、その手を取った。

2nd offense : Never move ACT・2

神法都市 グリシテイケンシアカ。

嘗て、神『グリシテイケン』から授かった国と言われている。

この国の特徴は二つ。

一つは、貧民区と中央区に分かれ大きな格差が生まれている事。

それが、神に愛された者と神に愛されなかった者だ。

愛されなかった者には、額の三本線に横線が入られている。

いつしか、横線入りは出来損ない達と呼ばれ貧民区に捨てられていく。

もう一つは、どの国にも属さない特殊な宗教団体があり、それによって法律が生まれている。

それは『かみのしるへ神法』と呼ばれるようになった。

その為に、宗教上で死刑制度が無く、数十年前には犯罪大国としても有名になっていた。

しかし、そこに新たな刑が生まれた。

終身刑よりも上の刑、『不動刑』と言う物だった。

これが出来てから、数年で犯罪は激減した。

それは一つの噂の所為でもあった。

ある不動刑に立ちあった人が、国から口止めを受けていた為にあまり明かさなかったが、彼はこう言い残した。

「あの刑は、死刑よりも恐ろしいかもしれない」と。

中央区に建てられた高く聳える塔。

そこへ向かうべく造られた五本の大通り。

その中の一つに、薄汚い布を被る人々の行列があった。

その人々は、手を枷で縛られ、顔も絶望しか感じ取れない表情ばかり。

発狂する者も居れば、泣き叫ぶ者も居る。 何度も何度も神に命乞いをする物も居た。

「黙れええ！！ 愚民共お！！！」

一人の警官による一括で、空気は一瞬で静まり返った。

手に持った鞭で地を叩き、苛立ちを隠せない口調でこう続けた。

「神の法に触れては、神に命乞いか！？ 神に愛されなかった奴らはトコトン腐ってんなあ！！！」

そして行列を進ませでは、「トロいんだよお！？ まともな足もくっ付いて無いのかあ！！？ 出来損ない共お！！！」と雄叫ぶ。

一旦行列から警官は離れ、煙草を銜える。

その瞬間に、部下が素早い動きで、煙草に火を灯した。

警官は溜め息を付いては、舌打ちを打つ。 苛立ちはまだ治まらないようだ。

「 ったく、アイツらは人間か？ 臭くて鼻がもたねえよ」

「グリッグル警部、安心してください。 もう直ぐで塔に着きますから」

「 やっとか……終わったたら酒にでも飲まれたいモンだ」

そしてグリッグルが煙草を地に捨て、足で火を擦り消した。

「よし、着いたぞ」

先ほどの青年が路地子の少女を連れて、中央の塔の麓に来ていた。

「これが、神様の像？」

「そうさ、グリシテイケン様の像だよ」

中央の塔の麓にある神様を象徴する巨大な彫刻。

それを祀るかのように咲く花たちに、鮮やかに水を噴出す噴水。

「アレ、持ってきた？」

「うん、スプレー缶。あるけど……どうするの？」

「まあ……神様の衣替え……かな？」

青年の笑顔の中には、悪巧みが混じっていた。

「あと、もう直ぐだな」

クリッグルは、高く聳える塔を見てそう呟く。

そしてその時、塔の異変に気付いた。

「煙……？」

塔の麓から煙が舞い上がっていた。

「何だ？ どつかの反信者^{バカ}が焚き火でもしてんのか？ たくつ、

仕事増やすんじゃ無えよ！」

「どうしました、警部？」

「どつかのバカが、神の御前で火遊びしてやがる。尻にお灸でも

据えてやれ」

部下は「分かりました」と言うなり、一足速く現場に向かった。

グリッグルは、仕事をどう押し付けるか考えている最中、通信機から音が漏れ出す。

「 たっ、大変です!!!!」

先ほどの部下の声が、通信機から爆音として流れ出す。

「五月蠅え！？ コッチは考え事してんだバカヤローがあ！！！」

「大変です、大変です！！ グリシテイケンが……グリシテイケンが！！！」

「ハア！？ グリシテイケンがどうした？」

五月蠅く鳴る通信機に耳を傾けながらも、グリッグル警部は塔の方へと走っていく。

そして、彼は塔の前で通信機を落とした。

目の前の光景が、余りにも奇怪、いや異常な光景すぎた。

美しくも壮大で、華やかでもあったあのグリシテイケンの像があった塔の麓にある庭園。

噴水が鮮やかに水を噴出し、壮大な空間の芸術を生み出している最中。

その背景で、グリシテイケンの像は

「グリシテイケン様が

燃えてます！！！！！」

通信機がそう唸りを上げ、グリッグル警部は開いた口が閉じないまま。

神様は白き焔を身に纏い、無残にも少しずつ少しずつ灰と化して崩れ去っていた。

そして地面に白い字で大きくこう書かれていた。

『またイタズラしにきます』

グリッグル警部がその文を読み終えたと同時に、グリシテイケンの腕が地面の上へと崩れ落ちた。

2nd offense : Never move ACT・2 (後書き)

ちゃんと文になっているんだろうか？

いつも書いてて気になります。

他の皆さんは、難しい言葉を巧みに使ってますが・・・自分は頭が

悪い高校生ですので！！

言い訳ですね、すみません。

3rd offense : Never move ACT・3

「何でだよ!? コレは彫刻だぞ!! 石なんだぞ!!!?」

グリッグル警部は落ち着きよの無い声を上げて、彫刻に近づく。

周りの部下が、「落ち着いてください警部! 危険です!!」と止めに入っても、軽く引き摺られていく。

「何だこの白い炎は!? 何故石が燃やされる!!!?」

「神の……子??」

部下の一人が思い出したような声を出すと共に、グリッグル警部も一つの逸話を思い出す。

「神の子? あの下らない御伽噺か!? ありえる筈が無いだろう!!!?」

「で……でも、白き焰を灯すとありましたし それに、彼らは木彫りの神の像を燃やされた……とも」

全く同じ光景だった。

御伽噺では神の子が祀った像、目の前にあるのは彼らが祀っていた像。

「嘘だろう……?」

グリッグルは像を見つめては、そう言うしかなかった。

「とんだ事をやらかしてくれたな、グリッグル警部」

静まった会議室の中心で、身を小さく縮め何度も「すみません」と呟くグリッグル警部。

それを囲むかのように並んだ四つの机と椅子。

椅子に腰を掛けているのは、誰もが異質かつ威厳のある空気を漂わせる5人。

四人とも、色々な役目を受け持つ大臣として働いている。最も豪いのは真つ先に声を出した、シアカ大臣。

「ですが、シアカ殿……ここで説教をしている場合では無いでしょう?」

シアカ大臣の隣から冷静な口調で話す。彼の名は、オルディオ。

「先ずは、この異端者の事についてでしょう? 我らの象徴を穢した愚かな反信者への制裁や搜索……などね」

「それは、私に御任せ下さい。 刑はもう決まりでしょう? オルディオ大臣」

真つ先に手を上げたのが、この四人の中でも最も若いローディウム大臣。

「『貴様に任せる!』、戯けた事をぬかすな、この一般人上がりが!! 貴様以前にも問題を起していたな……あの尻拭いは誰がしたと思っっている!?!?」

怒りの声を上げたのは、ローディウムを嫌うイズベンザ大臣。

ローディウムは俗に言う、『一般人上がり』の大臣』であった。

科学部門で大きな貢献と発展に係わった為、その部門においての大臣と言う大役を任された歴代唯一の一般人。

他の大臣は貴族などの『神に特に愛された者達』ばかりであり、少々ローディウムは周りより浮いているのは歴然だった。

「貴方も前に私に功績を取られたからと言って、八つ当たりしては困りますね。 結局は不動刑に私は必要不可欠なのです?」

一瞬の沈黙の中、イズベンザ大臣の舌打ちが会議室に響き渡った。

「なら今度こそ成功させて下さいね、ローディウム」
「グルヴァン大臣」

オルディオ大臣がそう告げ、その場を立った。

「何処へ行く? オルディオ大臣」

「……客が、待ってるもので」

そう言い残し、オルディオ大臣は会議室の戸を閉めた。

3rd offense : Never move ACT・3 (後書き)

必死こいて内容を考えてます。 けど、思いつきません。

もう学校や部活で大変ですよ。

授業中に考えては、内容を聞き忘れることもしばしば。

こんなんで大学行けるのかなあ？

「どういふ風の吹き回しですかい？ オルディオ殿」

「殿付けはやめてくださいよ」

ある喫茶店の中での会話。

貴族らしくない服装に身を纏ったオルディオ大臣は優雅にコーヒ―をそそる。

「もう一度言いますが、何故僕を呼んだのですか？」

「いや、まさか本当に神にお子様が居たなんて…と思ってね」

「面白いジョークと受け取らせて頂きますよ」

向かいの席に座るのは先ほどの青年。そして隣の席ではデザートに食いつく先ほどの少女。

「まったく…：せつかく楽しい悪戯が見られたとは…台無しですよ」

「大丈夫ですよ、他の人には告げてませんから」

「…：ならお願いですが、ある御方に合わせて頂きたいのですが」

「…：私にと言うことは、あの大臣の誰かと言う事ですか？」

「そうですね」

青年は手を組み、笑顔でそう告げる。

オルディオは沈着な目で、視線を隣の少女に向ける。

「この子、^{ダズライン}横線入りですね…：この子に関係が？」

「まあ、そこまで分かれば…：誰か分かるでしょう？」

オルディオは険しい顔に変貌し、2人から眼を逸らす。

息を呑み、一旦呼吸を整え、笑顔でこう告げる。

「その方の、道のりだけなら」

「ありがとうございます、あと出来れば立会人としてもあの方も」

「頼み事が多いですね…：出来る限りの事は勤めさせて頂きますよ、神のお子様」

そして一枚のメモ帳に書かれた簡略化された地図を青年は握り、少女に「もう行くよ」と告げ席を立たせる。

「名前ぐらい、教えてくれませんか？」

オルディオは聞いた。

少女の隣に並んだ青年の名を。

彼は微笑みながらその場を誤魔化しては、去って行く。

「また、今度」

彼はそれだけを言い残して。

「早く…早く、あの反信者を見つけなければ……」

ローディウムは塔内の研究室と化した自室で、落ち着きが無い様子でソファの上に座り込んでいた。

「バレたら…終わりだ……」

絶望色に染まった表情で頭を掻き耨る。

息はどんどん荒くなって行き、足がリズムを刻みだす。

「まず、反信者の情報をいち早く手に入れなければ……」

「大丈夫ですよ、私が知ってます」

ローディウムがその声を聴き、咄嗟に後ろを向く。

蔓延の笑顔をした青年と、見覚えのある顔つきの少女。

「お…とうさん？」

少女はローディウムの顔を見て、小さな声でそう言った。

少女の顔を見た途端にローディウムの顔は険しくなり、眼を逸らした。

「……誰だ、お前ら？」

「おやおや、まさかの感動の再会？ 遠慮しなくて良いですよ、おとうさま。ハグぐらいしたらどうです？」

「誰だと聞いている」

青年の棘のある言葉を無視して、ローディウムは告げる。

「名乗るほどの者ではありませんよ、ローディウム」グルヴァン殿

「では、貴方達は反信者という扱いでよろしいな？」

「信者でも反信者でもありませんよ、只の神の子供です」

その言葉を青年が伝えた瞬間、ローディウムが机に置かれた一丁の銃を手にした。

そして青年に向けて引き金を引き抜く。

「あれ？……殺しは貴方様の御宗教に違反なのでは？ ローディウム」グルヴァン殿

青年は銃弾を最小限の動作で避ける。

青年の言葉を聴いて、ローディウムは銃を力無く下ろす。

「そうだな、ここでは死刑はいけないな。たとえば、国を脅かす悪党だろうと」

ローディウムは、輪郭をなぞる様に掻き筆る。

「^{ネハイム↑フ}神ノ拘束具だ」

ローディウムは両手を大きく広げ、不敵な笑みを浮かべながらそう告げる。

彼は腰から、鎖が繋がった奇怪な形をした銃を引き抜く。

銃は他の片手銃より一回り大きく、銃口を突きつけられる時の圧迫感が一味違う。

「罪状を告げよう、名も知らぬ学の無い愚かな餓鬼よ。 宗教侮辱

財、加えて放火罪……不動刑だ」

「それ銃じゃないですか。確かに、死ねば身動き一つ拘束出来ませんがね」

「違うな、コレは。 打ち抜かれた罪人は先ず全身に激痛がほど走り、やがて体が硬直していく。 最後には全身を拘束しえ、最後には心音すらピタツと拘束だ」

「なるほど、だから貴方は焦っていたんですね？ 銃だから」

彼はその台詞が癪に障ったのか、眼が見開く。

それと同時に銃口を青年に向け、ローディウムの右指が引き金に掛かる。

そして、引き金は引かれた。

5th offense : Never move ACT・5

まずは腕と足を捕まえる

そして、足の指から手の指先まで

髪の毛先すらも拘束して

やがては瞬きすらも拘束する

そして呼吸さえも拘束して

最後には心の臓すらも捕まえた

神ノ拘束具の全

てから抜粋

轟音が異常な形状の鎖が銃口の下から飛び出る。
鎖は青年の腕を貫き、壁に突き刺さる。

「どうだ？ 驚いたか？ だがな、まだコレは前菜に過ぎないよ」

「あらら……身動きできないじゃ……ないですか。コレじゃ本番に
メインディッシュ

あり付けないではないですよ」

「大丈夫ですよ、私が貴方によそいますから」

青年の血が鎖に滴り、地面に水滴が落ちる。

「旅人さん！？」

少女が青年に突き刺さる鎖を掴む。
ローディウムは青年の前に近づき、少女を蹴り飛ばす。

「はは、妻の次には娘に手を出しますか。最低な親ですね、反吐

が出ます」

「何の事だ？」

ローディウムの眼が鋭くなるが、青年は笑い出しそんな表情で口を開ける。

「いやあ、一つ噂話を聞いたんですよ。ある一人のお偉いさんが必死に上り詰めた御席に、彼はゆうゆうと座り込んでました」

彼が物語を語る口調で次々に話す。

妻に恵まれ、子に恵まれたそのお偉いさんは幸せな生活を営もうと考えていた矢先、とんでもない事が起こりました。そう、娘が横線入りだったのです！ お偉いさんはそれを知った途端、こう思いました。ばれたら人生の終わり……そうだ、娘を貧民区に捨てよう！ そう妻に話すと、妻は大激怒！ 彼と大喧嘩になった挙句、お偉いさんは机にあった神に授かったある物で妻を殺しました。

そう、神ノ拘束具です。

お偉いさんも、「彼女がまがい物の血だったんだ」と思い込み、その場は一安心しました。

しかし、そこにある問題ができました。

只でさえ、国で問題視されている神ノ拘束具ネバームープなのに妻に私情で使ってしまった。

神ノ拘束具は銃の為、弾と言う物があります。その弾数が受刑者と合わなくなってしまうのです！

「　　」という話です。まあ、長々となりましたが……この

話、貴方も知っているでしょう？」

彼の眼光は話が進むに連れ、鋭くなっていく。

「貴方はどうしても『誰も知らない不動刑の者を探したかった』……理由は、弾数を合わせる為」

「そうだな、その者を殺せば……弾数はあつてしまうものな」

「まあ、それが貴方ですよ。この横線ダズライン入りの少女が……貴方の娘、ですね？」

青年は痛みを堪え、笑顔でそうローディウムに告げる。

「そうだ、そのまがい物の餓鬼は私の子供だ……が、それがどうした？ 元を断てば問題無しだろう？」

「さすが、最低な人間だ」

ローディウムはゆっくり、銃口を青年の額に当てる。

「褒めてやろう。よく知りすぎた、と。だがな『無知は罪』だが、『全を知る事も罪』だつて事を知らなかったようだな」

「私をソレで殺すと、また弾が合いませんが？」

「安心しろ、反信者は『2人だった』。だから弾を二つ使つたと。そこの出来損ないを殺るには普通の弾で充分だ」

「それは、大変だ。神の子として……その罪は見逃せません、ね。必死に青年は手を伸ばし、銃身を掴む。

ローディウムは「無駄な抵抗だ」と呟き、引き金を引き抜いた。

「悪戯、しにきたよ」

彼は不敵な笑みを浮かべながらそう呟いた瞬間、銃から白き火花が散った。

6 t h o f f e n s e : N e v e r m o v e A C T : 6

神ノ拘束具ネバーアップから、火花が散った。
それと同時に異変が起こる。

「弾が出ない……!?!」

何度も引き金を引くが、出てこない。 勿論、弾を入れ忘れる筈が無い。

その瞬間手に握っていた物が、白い焰に包まれた。

「!?!」

ローデウイムは、反射で銃から手を離す。

何だ、アレは？ 熱さを全く感じなかった。

しかし、銃は白い焰で身を纏っている。

銃に眼が行っていた時、死角から腕を捕まれた。

「残念でした！ 神ノ拘束具ネバーアップは、神ノ悪戯ホワイトブラントクに燃やされてしまいましたとさ！」

「うわっ……うあああ!!!?!?!」

咄嗟にローデウイムは青年の手を振り払い、青年に背を向け入り口へ疾走した。

それと同時に、青年に突き刺さった鎖も白き焰に飲み込まれて、銃と共に脆くも崩れ去る。

ローデウイムは部屋のドアを壊れるかと思うほどに大きく開ける。

「ローデウイム!! グルヴァン殿、それは誠かね？」

ローデウイムは前に立ちはだかる3人の人物を見て、眼が見開く。

「何で……?!?!」

そこに居たのは、冷徹な口調で話すシアカ大臣と、笑みを浮かべるオルディオ大臣。そして最も敵視していたイズベンザ大臣。

「はあ、分かってくれると思ったんですがね？」

塔の一回にある大広間で、オルディオと青年が話をしていた。

「何故、貴方は彼の事にお気づきになられたのですか？」

「神の子供ですから」

青年は笑顔でそう答えた。

「まあ、彼も神の焰に焼かれて、もう一度悔いを改めて貰いたいものですね」

彼は全身を焼かれたが火傷は残っておらず、痛みだけが彼を襲ったらしい。

「アイツ、悔い所か全部改めたんじゃねえの？ 放心状態だったぜ」
イズベンザ大臣が、彼の焼かれた後を見てそう告げた。

「まあ、それでは。ココらで御悪戯は終わりと云う事で」

「そうですか、またいらして下さい。御持て成しはいたしますよ」
オルディオ大臣がそう告げる。

「まあ、とりあえず皆さんには…神以外にも眼を向けて貰いたいモノです」

そして彼は入り口の方へ歩き寄る。

少女も彼の隣の方へ歩き寄った。

「この少女はお預かりします」

そこでシアカ大臣が、思い出したようにこう告げた。

「そうだ、聞き忘れてましたな…貴方のお名前は？」

青年は笑顔でこう言った。

「グリシテイケン Jr……とでも呼んで下さい」

彼がとっておきのジョークを告げたと同時に、彼の触った入り口から白き火が灯った。

大臣達はそれに見惚れ、火は彼らの後ろの方へと広がっていく。

「ははっ、やられたな……いい悪戯だったよ」

シアカがそう告げる。

後ろの壁が白き焔に包まれて崩れ去っていく。

その先には、この国の誰もが眼にした事のある一つの像。

『お借りしました』との紙に書かれたメッセージが、像に貼り付けられている。

彼ら在必死に前を向いて愛を求められていた主人は

彼らの後姿を静かに見守っていた。

「さて、神のしるべだ！！
ストリートシチルドレン 路地子の保護の要請を！！！！」
シアカ大臣の声が、大広間に広がった。

「ねえ？ あのにせものの像は、どうやってよゝいしたの？」
「いいだろう？ アレ、神様がくれたんだ」

6th offense : Never move ACT・6 (後書き)

Never move 編 完結です。

今回は未だに序盤すら書き始めていません……

あと、どんどん書き直してすみません!!

一回見たのに、もう一回見たら全然違う!! って事もありません……

矛盾や脱字、誤字などあったらお知らせ下さい!!

あと、感想ドシドシお待ちしております!!

来たら泣きます!! 本当に!!

あと分かり辛いかもしれませんが、いきなり出てきた『フリーダ
グルヴァン』と言うのは、

ローディウムの妻の名前です。

一応、それで(多分)辻褄があうと思います。

色取り取りの芸術の都 フォルモンシエ
人々は美しく色華やかな衣装に身を纏い、そこからは多くの芸術家
が生まれた由緒正しき芸術の都。

しかしそんな国が黒色に染まった。

原因は、芸術性センスの欠片も感じれない王様だった。

幾多の女性と恋愛関係を持った王様は、ある日一人の女性に恋をし
た。

女性は言った。

「他の人からは、縁を切つて」

「分かった、私はお前色にしか染まらないよ」

そういう馬鹿げた会話から、一月の月日を掛け国を黒色に染め上げ
た。

王様が彼女に一番似合う色だといって。

いつしかその黒色は痛みペインカラーの色と呼ばれ、その日を『痛みを塗られた
日』と呼ばれた。

黒く塗られた国の黒く染められた小さな橋。

河は喉かに流れ、唯一の黒色じゃない者が心を安らがせる。

そこに大量のペンキを足元に、手にはブラシを持った作業服に赤の
帽子を被った青年が居た。

「絵、上手いですね」

「ありがとうございます」

そしてもう2人、青年と少女がその絵を見て感想を呟いた。作業服の青年は感謝を告げると、黙々と作業に取り込んだ。

「何の絵を、描いているんですか？ オルドーさん」

「……どうして、私の名前を？」

「有名ですよ。世界で多くの絵画を残した天才、オルドー＝リオトン。一枚の絵で家を建てられるとか……」

「買い被りですね。私は、こんな所に落書きをしか出来ない只の餓鬼です」

「そんな筈無いですよ。芸の学が無い私でも凄いのは分かりますよ？」

イヴァは一旦ブラシをペンキ缶に入れる。

「これは……私の反逆の証ですよ」ストリートアート

「ああ、コレが例の……実物を見るのは初めてです」

「ねえ、旅人さん。すとリーとあーとって？」

「簡単に言うと、私達に絵を描かせろって、みんなが反抗をして街中に裏ルートから手に入れた画材で絵を描くんだけ」

「とりあえず、街に絵を描くの？」

「そうだよ。コレも全部、とつても高いお金で買ったんだ」

オルドーが笑いながら、少女に伝える。

「で、この絵は何を描いたんです？」

青年が、オルドーに聞き直した。

オルドーは声を詰らせ、表情が少しだけ険しくなっている。

「心……ですかね？」

「心。心ですか。なら貴方の心は随分ゴチャゴチャになってるんですね」

「そりゃそうですよ。心は複雑なんですよ？」

「そうですかね？ 私は一色で表せますよ？」

「へえ、そんなんですか……っと。アレ、ペンキ切れちゃったか……」

オルドーは空になった缶に筆を置き、その場に座り込んだ。胸元のポケットから煙草を取り出し、口に銜える。

黒のライターで煙草に火を灯し、煙を勢いよく吐き出す。

「はあ、ここでお終いか」

オルドーは下を向き、愚痴りだす。

「それじゃ、画材を持って来たら、続き描きますか？」

「はは、持ってこれたらね」

「約束ですよ」

青年はそう告げると、少女と共に黒色の街へと姿を消した。

7th offense : Paint pain ACT・1 (後書き)

長らくお待たせしました。

いや、テストなどでホント遅れました。

まだ終わってませんがね……まあ気にしない方向で。

今回は一気にこの話を今日中に完結させます!! といつかもう書きました!

一応、芸術の都……芸術とか全く分かんね!!

フォルモンシエ 中央街の創立記念公園にある、多くの年月を超えて身をボロボロにしながらも未だに残してある銅像。

創立以来、ずっとそこに立ち続けていた初代 国王の銅像。

黒き絵の具に滴らされて、全身痛み色に染め上げられた。

そして創立以来、幾多の天災を耐え抜いき、今尚痛みに耐え続けている像に終わりを迎えた。

公園の地面に鈍い音を立て、彼を支えていた足元から地面へと落下する。

落ちた瞬間、五体が満足できない状態に碎け散り、そのまま灰に変わっていく。

しかし白き焔を身に纏った王様は、何故か救われたような顔をしていた、ように見えた。

足元に、「イタズラしてきたよ」と残して。

「像？ 何だそれは？」

「創立記念公園に建てられた初代国王の銅像です」

フォルモンシエ 歴代で最も嫌悪されている最低の王様に、秘書は事件を告げた。

「ああ……あの薄汚い像か。 どうでもいい。 それよりリジエン嬢はどうした？」

「いま、食事中です」
「わかった、いますぐ行く」
国王が私室の扉を荒々しく開け、油の乗った脂肪だらけの体で彼女のもとへと歩みだす。
秘書は小さく溜め息を付き、荒れた王の部屋を片付ける。
もし片付けていなかったら、「誰だ！ 私の部屋を荒らしたのは！」と殴りつけるのを知っているからだ。
「糞……」
秘書は誰も居ない部屋で小さく愚痴を零し、ぐちゃぐちゃのベッドを直した。

「リジエン……やはり、お前は黒が美しい……」
「ありがとうございます、王」
リジエンと呼ばれた女性は漆黒のドレスに身を纏い、朝食を黙々と口に運んでいた。

上品な手付きで食事を済ませ、その場を立ち上がる。
「待ちたまえ、リジエン。話をしようじゃないか」
「……分かりました」

リジエンは再び椅子に腰を掛け、王の無駄話を聞かされる。
『芸術は〜だ』とか、『私は〜の天才だ』とか、何百回も同じような内容を聞かされる。

最後には『やはりお前は美しい』との口説き文句。吐き気がする。
リジエンは、「そろそろお時間ですので」と席を立ち、私室へ戻る。

私室の戸に鍵を掛け、身につけていた黒のドレスを荒々しくベッドの上に脱ぎ捨てる。

しかし、クローゼットの中には全て痛み色ペインカラーに染め上げられた衣装ばかり。

下着の色すらも痛みを塗られた色しかないのだ。

彼女はとてもお洒落好きで有名だったが、それはもう昔の話。

親に多額の金を渡し、両親の了解も得ずに勝手に城に住まわされた。彼女が持っていた服は全て燃やされ、今では同じ様な痛み色ペインカラーのドレスを着させられている。

深く溜め息を吐き、痛み色ペインカラーの毛布に包まれ、部屋の隅に座り込む。

「お嬢さん、お嬢さん。 どうしてそんなに落ち込んでいるんですか？」

咄嗟に聞えた声に驚き、全身を包んでいた毛布から顔を出し周りを見渡す。

その瞬間、窓から一陣の風が吹き出て、髪を靡かせる。

その窓際に立つのは青年と少女。

「な、何者です……!?!」

「私は、貴方様の悲しき表情に呼ばれた旅人ですよ」

「それより……どうやってココに……!?!」

「いや……それより、貴方にはその色は似合いませんよ」

青年はベッドに脱ぎ散らかしたドレスを見て、そうリジエンに告げた。

「そんな事言っただって……他に色が、無いんですもの」

青年は彼女に笑顔でこう告げる

「大丈夫ですよ　私が……着付けをしましょうか？
お嬢様」

青年はゆっくり片膝を地に付けて、ゆっくり彼女の方へ手を伸ばす。

彼女は、戸惑いながらもその手を取った。

「貴方にはやはり白が似合う。だって貴方の

」

彼がその言葉を告げ終えると、彼女はほんの少しだけ笑みを浮かべていた。

8 t h o f f e n s e : P a i n t p a i n A C T ・ 2 (後 書 き)

もう次でプロローグを含めて10話!!

でも、ホントはプロローグを含まないで欲しいんです。

だって、10話目にちよつとした話を入れたいからです!

なので、今はまで8話って事で……

「大事なお話がありますの」
リジエンが王様にそう呼び出したのは、城の屋外。
ここからなら、国を全て見渡せられる絶景な筈だった。
しかし、今では黒く染め上げた街が一面に並べられ、芸術の欠片も
なくなっている。

「リジエン、何処だ？」

王様が、屋外でリジエンを探す。

風が吹き通る屋外の真ん中、彼女は痛み色のドレスを身に纏って
いた。

周りには綺麗に並べられた痛み色の衣装。

「どうした、リジエン？ 大事な話とは？」

「私は、貴方色には 染まりません」

彼女がそう言い終えたとき、彼女の服に白い焰が灯される。

瞬く間に、焰は彼女を包み込み足元に置かれたドレスにも焰は広
がる。

そして焰はすぐに消えた。

彼女の身を包んでいた痛み色の衣装と共に。

吹き抜ける風に灰が乗り、彼女のドレスは消えていった。

「ど、どうしたのだ！？ リジエン！！？」

「言ったでしょう？ 彼女は貴方色には染まらないと仰っている
ですよ」

彼女の裏から青年が不敵な笑みを浮かべ現れた。

「芸術性の欠片も感じられない、貴方の色には染まりたくないそう
ですよ？ お嬢様は」

「貴様……！ 私を愚弄する気が……！」

王様は怒り震え、鋭い眼光を青年に向けている。

「貴方の芸術より、子供の落書きの方がよほど芸術がある。貴方の書いたのは紛れも無い駄作なのですよ……！ 王様……！」

王様はその発言を耳にした途端に、雄叫びをあげ青年に拳を振る。青年は軽々と拳を避けては、王様の頭を鷲掴みにする。

「眼に焼き付けてくださいよ」

その台詞と共に、彼の眼に焰が焼き付けられていく。

「コレが、私の芸術ですよ……！」

そして、王様が塗った痛み色ペインカラーに白き焰が灯された。

国中が、白き焰に包まれた。

騒ぎを起した国民は、急いで消火に励んだが、火は衰えず痛み色ペインカラーだけが削げ落ち、元の色を取り戻した。

痛み色ペインカラーが無くなった時には、白き焰は消えていて、その焰は『神の焰ホワイトフラッシュ』と呼ばれるようになった。

王様はその日以来姿を消し、次期王がいまでは国を統べている。

「ははっ、来ましたよ。 オルドーさん」

青年が両手にペンキを、少女が何缶もののペンキを必死に持ち歩い

てきた。

オールドーは作品の横で壁にもたれながら、煙草を吹かしている。

「疲……れた……」

「よしお利口さんだ」

十個程度はあるペンキをオールドーの前に置く。

「続き、よろしく願いますよ」

「まったく、こんなに要らないのに……切れたのは白だけですよ？」

「いいじゃないですか」

そして彼は銜えていた煙草を地に捨て、靴裏で火を擦り消す。

彼は白のペンキ缶を持ち作品の前に立つ。

そして、彼は作品に向かってペンキを撒き散らした。

作品は一瞬で白色に染まり、跡形も無くなっていた。

「いいの？ おにいさん？」

少女がオールドーに尋ねた。

「大丈夫だよ、だって俺の心は

純白ですからね！」

「あつ、旅人さんと同じ事言った」

そして彼の反逆の証は、そこに残っていた。

横に「イタズラカンリヨウ」という白い字と共に。

9th offense : Paint pain ACT・3 (後書き)

Paint pain編完結です。

もう時間無かったんで、すぐ終わっちゃいました……

3回で終わるとはね、予想してませんでした。

あと、次の番外編以降は全く考えておりません……

というか、もう一つ小説書くと思います。

ファンタジーじゃなくて、現代物!!

スポコン……は無理だけど、そう言っの書きたい!!

まあ、いつか投稿するのでそちらもよろしくお願いいたします!

やっときさ、実質10話目!!

この話は自分が今、一番尊敬している漫画家さんの漫画にちょこつと載っているお話をリメイクして載せました。

その漫画は、この小説の目標地点です。

儂く遠くて、手を伸ばそうが、足を伸ばそうが、届きやしなくて。必死に階段上り詰めて、その漫画の一部でも掴める様、日々努力していきたいです。

それでは、そうぞ!!

10th offense: Rich man's story

あるところに、言葉を売る国がありました。

挨拶の言葉から、差別用語まで。最西端の国の言葉から、最東端の国の言葉まで。

多種多様な色々な国言葉売り買いしていました。

そこに住むととても大金持ちの男は、色々な言葉を買って占めては人々を困らせました。

ある時は、「おやすみなさい」の言葉を買って占め、寝る時の挨拶を誰も言えなくなったり。

ある時は、「おいしい」の言葉を買って占め、とてもおいしい物を食べた時でも「まずい」としか言えなくなり、喧嘩沙汰にもなったり。

しかしそんな我儘の男にも、春がやってきました。

それはある日、この国に住もうとする他国の若い女性でした。

男は必死に、口説き文句を買いあさりにあさりました。

『I LOVE YOU』から、『愛してる』や、『Je t'aime』とか。

『Ich habe dich gern』や、『Anh y e u e m』等と、全部の愛の言葉を買い占めました。

そしてある日、男は女性に全ての口説き文句をぶつけました。

しかし、彼の恋は実りませんでした。

なぜなら、彼女の国の愛の言葉まで買ってしまったのですから。

「ってお話、どう？ 出来、良かった？」

「うーん……………何かおかしいよ。おいしいうって言葉が買われても、ふつうって言えば良いと思うんだけど……………」

「咄嗟には出なかつたんだよ、きつと……………」

「それにね、ずうーっと前の言葉使ってるのに、買われちゃっただけでは忘れないと思うよ？」

「……………それはね、お話だからだよ」

青年の顔は苦笑이었다。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8288g/>

white prank

2010年10月21日12時43分発行